

支援してくれた人々に感謝を込めて

初夏に、子どもたちも一緒に田植えをした田んぼで、秋にはもち米がたわわに実りました。取れたもち米はボランティア団体に贈られ、また東無田八幡宮にも供えられ、地域の皆さんでおいしくいただくというものです。

境内には集まった人たちの熱気が広がります。輪の中には、広島から訪れた伊藤博暁さん(43)がいました。伊藤さんは地震直後から3カ月ほど滞在し、ボランティアとして東無田の被災者支援に尽力しました。「来るたびに景色が元気に生まれ変わっていて、うれしくなります。東無田にはたくさんの親戚がいるよな気がして、思わず『ただいま』と口に出ます」と明るく笑いました。

ボランティアで東無田に入り、広島からイベントに駆け付けた伊藤さん



大きな鍋に50人分の豚汁

熊本地震で被害が大きかった東無田地区ですが、皆さんはこれまで力を合わせながら復興へと歩みを進めてきました。その拠点となったのが、東無田八幡宮でした。

「みんなで力を合わせることで乗り越えられた気がします。テレビのインタビューで私が、『家は全壊だけど、パワーは全快』とつい口を滑らせた」と話す森永さん



らせてしまつて(笑)。知り合いから『元気をもらった』という声が届きました」とほがらかに話すのは、東無田地区の女性たちで結成された「絆」のメンバーの一人、森永映子さん(75)です。

会の皆さんはせわしなく、大きな鍋に50人分の豚汁を用意しました。つきたての餅と温かい豚汁を頬張る、子どもたちの笑顔の花が咲きまします。みんなで一緒に食べると、おいしさも倍増ですね。

東無田に移住「とても住みよい所」

地震から現在までの間に、東無田地区の人口は増えています。新築の家々には、町にUターンして2世帯、3世帯で暮らす人が多く、子どもの人数もぐつと増えました。

岐阜県出身でシステムエンジニア



豚汁を頬張ったり、つきたての餅に舌鼓を打つ、東無田地区の皆さん

の高木隆明さんと妻の彩子さん、長男の快晟くん(3)家族も、移住した一組。妻の彩子さんは益城町出身で、二人の出会いはタイのバンコクでした。その後結婚した二人は5年前、1年9カ月をかけて39カ国を巡ったそうです。暮らしの拠点を熊本に移すと、1年半前に東無田に越してきました。

「以前から益城町に住みたいと思っていました。ここはとても暮らしやすいところです」と隆明さん。「地域の集まりにも参加しやすく、皆さんが笑顔で手を広げてくださいます」と彩子さんはうれしそうに話してくれました。



東無田地区に移住してきた高木さん家族